



近藤恒弘さんを追悼する

大里 浩秋

(非文字資料研究センター 客員研究員)

天津日本租界を中心に天津、さらに中国北方に関する資料を多数非文字資料研究センターに寄贈していただき、さらにご自身の天津経験を積極的に証言して下さった近藤恒弘さんが、2019年9月26日にお亡くなりになった。享年90歳、奥様のお話では夏までお元気で外出されることもあったが、秋口に少し入院された後お家で90を迎えて数日にして大往生を遂げられたとのことである。

私が近藤さんにお目にかかった最初は2010年だったろうか、租界班で子供時代を天津で過ごした4、5人の方にその頃の体験を語っていただく集まりを開いた時だった。その後、天津関連の資料をたくさんお持ちと伺って、お宅にお邪魔して資料を拝見しながらお話をお聞きする機会があるうちに、整理がついた資料から順に私たちに寄贈したいとおっしゃって下さった。天津の資料を集めることになり、その資料を私たちに寄贈して下さった経過は、ご本人のお話では次のようであった。

—1929年に天津で生まれ天津日本中学校4年の時に終戦となり、1946年日本に引き上げた後中学の同級会を毎年開いてきて、2002年には天津で開こうという話になった。その際私が幹事役になって天津行のガイドブックを作ることを思いついて天津にかかわる資料を集めたのがきっかけで、その後12年間集めてきたものが相当数になった。そこで租界のことに関心を持っているあなた方に寄贈することを思いついた(2014年2月15日「東アジアの租界・居留地とメディア」研究会での発言、のち『非文字資料研究センターニューズレター』第32号に掲載)。天津に生まれ育ち帰国後も天津に愛着を感じてきたことが熱心な資料収集に結びついたのであり、その資料群が2013年から数回に分けて私たちに届けられることになった。

近藤さんが収集した資料中の圧巻は、天津に日本租界が置かれて数年後の1900年代初めから日中戦争時期に至る1000枚を超える天津とその周辺地域に関わる絵はがきと写真である。それらを十分に生かした研究や紹介はいまだできていないけれども、数回展示して公開してきたし、「戦前中国の風俗絵はがきの世界」のタイトルで『ニューズレター』第38号から第41号に連載

した。

また、2014年6月には東京女子大教授(現在名誉教授)で非文字資料研究センター研究協力者の栗原純さんと一緒に近藤さんの天津経験を長時間語っていただく機会



近藤恒弘さん。2014年2月15日「東アジアの租界・居留地とメディア」研究会

を持ち、それをまとめて「近藤恒弘氏に天津日本租界での体験を聞く」と題して『非文字資料研究』第13号に掲載することができた。それをまとめるにあたって事実確認のためにお宅にうかがっているお話できたのはいい思い出である。お手持ちの写真をたくさん利用させていただいた近藤



近藤さんが寄贈して下さった天津の絵はがき。『ニューズレター』第38号に掲載。

さんの回想をぜひ読んでいただければと思う。

まだ差し上げたい資料が残っていますよ、と奥様がおっしゃっていた。近藤さん、どうか安らかにお休みください。